

大分県内遺跡発掘調査概報 11

2008

大分県教育庁埋蔵文化財センター

例 言

- 1 本書は大分県教育委員会が平成19年度国庫補助事業として実施した、大分県内遺跡発掘調査事業の概要報告書である。
- 2 調査にあたって県農政部・県林業水産部・県各地方振興局・県内農業基盤整備事業担当課・県下各市町村教育委員会・大分森林管理署・県教育委員会理財課・陸上自衛隊玖珠駐屯地の御協力をいただいた。
- 3 現地での写真撮影・遺構実測は各調査員が担当した。
- 4 遺構図面・地図トレース等概報作成に伴う諸作業については、各調査員が担当した。
- 5 本書で使用する方位は、1/10,000・1/25,000・1/50,000地図は座標北で、台場略測図は磁北である。
- 6 図面・写真等は、大分県教育庁埋蔵文化財センターにおいて保管している。
- 7 本書の執筆は、小林昭彦・小柳和宏・綿貫俊一・横澤 慈が行い、分担箇所は目次に明記した。編集は横澤が担当した。

目 次

はじめに (横澤).....	1
I 農林業関係遺跡分布調査 (綿貫).....	2
自衛隊玖珠駐屯地内遺跡確認調査 (小林)	7
II 公立施設関係遺跡試掘・確認調査	8
1. 国東農工高等学校 (小林).....	8
2. 上野丘単位制高等学校 (小柳).....	9
III 西南戦争戦跡分布調査 (横澤)	10
1. 津久見市津久見峠・鎮南山.....	11
2. 豊後大野市三重町三国峠・旗返峠.....	12
3. 豊後大野市三重町梅津越.....	18
4. 佐伯市蒲江轟越.....	19
5. 佐伯市直川陸地峠.....	21
6. 佐伯市宇目大原越.....	21
7. 佐伯市宇目赤松峠	21
総括.....	22
報告書抄録	24

はじめに

大分県教育庁埋蔵文化財センターでは、平成19年度国庫補助事業として農林業関連事業等に伴う分布調査、自衛隊玖珠駐屯地、県立学校等公立施設の開発に対する試掘・確認調査を継続するとともに、西南戦争戦跡の分布調査を行った。

農林関連事業分布調査は、平成19年度に大分県教育庁埋蔵文化財センターが県内市町村教育委員会の協力を得て実施した農林業関係事業(平成20年度工事予定地区)の埋蔵文化財分布調査である。本年度実施の調査は49箇所であり、その概要は第1～4表のとおりである。事業予定地の埋蔵文化財分布調査を平成19年9月～10月に実施した後、追加調査を平成20年2月に実施した。また、陸上自衛隊玖珠駐屯地内でも確認調査を実施したほか、公立施設の事業についても分布調査を実施し、国東農工高等学校で立会調査、上野丘単位制高等学校で確認調査を実施した。

西南戦争戦跡分布調査は津久見市、豊後大野市三重町、佐伯市蒲江で分布調査を行ったほか、これまでに確認した台場の測量を行った。同調査は平成16年度から実施しており、本年度は4年目である。

平成19年度の調査体制は下記のとおりである。

調査組織

調査主体 大分県教育委員会

大分県教育庁

埋蔵文化財センター	所 長 (文化課長兼務)	阿南 正美 (平成19年4月まで)
	所 長	福田 快次 (平成19年5月から)
	次長兼調査第一課長	坂本 嘉弘 (平成19年5月から)
	次長兼総務課長	岡本 義博

調査第一課	課 長	栗田 勝弘 (平成19年4月まで)
	課 長 (次長兼務)	坂本 嘉弘 (平成19年5月から)
大型事業担当	主 幹	高橋 信武
	主 幹	江田 豊
	主 事	横澤 慈
一般事業担当	主 幹	小林 昭彦
	主 幹	小柳 和宏
	副主幹	綿貫 俊一

調査第二課

受託事業担当	主 事	越智 淳平
--------	-----	-------

佐伯市教育委員会社会教育課

畔津 宏幸

1 農林業関係遺跡分布調査

大分県教育庁埋蔵文化財センターでは県内の農林業関係事業について、開発部局に対して事業照会のうえ、事前に埋蔵文化財の分布調査を実施している。平成19年度に県下市町村教育委員会の協力を得て実施した分布調査(平成20年度事業予定地)は、第1～4表のとおりである。また、市町村別の調査箇所および判定の内訳を第5表に、各事業所別の調査箇所および判定の内訳を第6表に示した。

分布調査は平成19年9月から10月にかけて当初予定分の37箇所で行った(第1～3表)。平成20年2月にはその後事業が確定した12箇所で行った(第4表)。調査箇所は合計49箇所である。

その内訳は、A判定(周知の遺跡に該当し確認調査が必要)は2箇所、B判定(周知遺跡外であるが試掘調査が必要)は13箇所、C判定(工事時の立会調査が必要)は0箇所、D判定(事業実施に問題なし)は31箇所、E判定(事業予定地が未確定等、再度の分布調査が必要)は3箇所である。

第1表 平成19年9～10月実施分布調査一覧表(1)

No.	事業名	地区名	工事場所	実施面積ha 実施延長m	振興局・課名	工事開始時期	関係市町村	判定
1	大分の茶産地強化 対策事業		杵築市山香町 カヤノ原	5.0ha	東部振興局 生産流通部 企画流通班	平成20年6月	杵築市	B
2	山村等振興対策 事業	宇目	佐伯市宇目柳瀬	200m	南部振興局 農産漁村 振興部 企画流通畜産班	平成20年4月	佐伯市	D
3	農村振興総合整備 事業	エランド 山香	杵築市山香町大字 野原字鹿鳴越	7.84ha 2,160m	東部振興局 日出水利耕地事務所	平成20年4月	杵築市	B
4	農村振興総合整備 事業	野津	臼杵市野津町大字 前河内～大字吉田	660m	中部振興局 農林基盤部 農村整備第二班	平成20年11月	臼杵市	B
5	農村振興総合整備 事業	野津	臼杵市野津町大字 烏嶽	7.0ha	中部振興局 農林基盤部 農村整備第二班	平成20年11月	臼杵市	B
6	農村振興総合整備 事業	臼杵	臼杵市大字末広 (黒丸)	4.8ha	中部振興局 農林基盤部 農村整備第二班	平成20年11月	臼杵市	B
7	農村振興総合整備 事業	臼杵	臼杵市大字末広 (下末広)	0.8ha	中部振興局 農林基盤部 農村整備第二班	平成20年11月	臼杵市	B
8	農村振興総合整備 事業	臼杵	臼杵市大字高山 (木ヶ畑・越崎)	4.0ha	中部振興局 農林基盤部 農村整備第二班	平成20年11月	臼杵市	D
9	農村振興総合整備 事業	臼杵	臼杵市大字高山 (山路・高須)	7.0ha	中部振興局 農林基盤部 農村整備第二班	平成20年11月	臼杵市	D
10	農村振興総合整備 事業	臼杵	臼杵市大字嶽谷 (中ノ川)	2.0ha	中部振興局 農林基盤部 農村整備第二班	平成20年11月	臼杵市	D
11	広域農道整備事業	大分中部	大分市大字沢田	L=100m	中部振興局 農林基盤部 農村整備第一班	平成20年10月	大分市	D
12	中山間地域総合 整備事業	蒲江	佐伯市蒲江大字 丸市尾浦	3.5ha	南部振興局 農林基盤部 農村整備班	平成20年5月	佐伯市	D
13	経営体育成基盤 整備事業	久住南部 巢原工区	竹田市久住町大字 白丹	9.0ha	豊肥振興局 農林基盤部 農村整備班	平成20年5月	竹田市	D

第2表 平成19年9～10月実施分布調査一覧表(2)

No.	事業名	地区名	工事場所	実施面積ha 実施延長m	振興局・課名	工事開始時期	関係市町村	判定
14	経営体育成基盤整備事業	下坂田 下坂田東工区	竹田市大字下坂田	5.0ha	豊肥振興局 農林基盤部 農村整備班	平成20年5月	竹田市	E
15	経営体育成基盤整備事業	岡本 中村羽恵工区	竹田市大字中村 羽恵	4.0ha	豊肥振興局 農林基盤部 農村整備班	平成20年5月	竹田市	B
16	中山間地域総合整備事業	大山(上野)	日田市大山町 西大山上野	集落道 500m	西部振興局 農林基盤部 農村整備第一班	平成20年5月	日田市	D
17	ため池等整備事業	萩尾	日田市二串	ため池 1ヶ所	西部振興局 農林基盤部 農村整備第一班	平成20年6月	日田市	D
18	経営体育成基盤整備事業	古後	玖珠町古後神原、 道ノ迫	ほ場整備 10.0ha	西部振興局 農林基盤部 農村整備第二班	平成20年5月	玖珠町	B
19	広域農道整備事業	玖珠2期	玖珠町岩室	路床工300m トンネル214m	西部振興局 農林基盤部 農村整備第二班	平成20年6月	玖珠町	D
20	農免農道整備事業	大原野	日田市天瀬町本城 玖珠町山浦	路床工 500m	西部振興局 農林基盤部 農村整備第一班	平成20年5月	日田市 玖珠町	B B
21	ため池等整備事業	ハジガ谷池	中津市本耶馬溪町 東屋形	43m	北部振興局 農林基盤部 農村整備第一班	平成20年5月	中津市	D
22	ため池等整備事業	冠石野上池	中津市本耶馬溪町 冠石野	44m	北部振興局 農林基盤部 農村整備第一班	平成20年11月	中津市	D
23	農業用河川工作物 応急対策事業	荒瀬	中津市本耶馬溪町 樋田	取水ゲート 改修1式	北部振興局 農林基盤部 農村整備第一班	平成20年8月	中津市	D
24	農業用河川工作物 応急対策事業	高松	中津市大字植野	頭首工改修 1式	北部振興局 農林基盤部 農村整備第一班	平成20年8月	中津市	D
25	農村振興総合整備 事業	諸田定留 (諸田工区)	中津市大字和田	14ha	北部振興局 農林基盤部 農村整備第一班	平成20年11月	中津市	A
26	広域農道整備事業	耶馬溪東部	中津市本耶馬溪町 西谷	400m	北部振興局 農林基盤部 農村整備第一班	平成20年6月	中津市	D
27	中山間地域総合 整備事業	耶馬溪南部 (藤木集落道)	中津市耶馬溪町 大字山移	600m	北部振興局 農林基盤部 農村整備第一班	平成20年10月	中津市	D
28	ため池等整備事業	新貝大池	宇佐市安心院町 境ノ坪	9.0ha	北部振興局 農林基盤部 農村整備第二班	平成20年10月	宇佐市	D
29	ため池等整備事業	城山上池	宇佐市院内町櫛野	9.0ha	北部振興局 農林基盤部 農村整備第二班	平成20年10月	宇佐市	D
30	中山間地域総合 整備事業	両院2期 (有徳原)	宇佐市安心院町 有徳原	パイプライン 1,500m	北部振興局 農林基盤部 農村整備第二班	平成20年9月	宇佐市	D
31	ため池等整備事業	愛宕池	豊後高田市田染 平野(予定)	未定	北部振興局 農林基盤部 農村整備第三班	平成20年8月	豊後高田市	E
32	ため池等整備事業	上野新池	豊後高田市田染 平野(予定)	未定	北部振興局 農林基盤部 農村整備第三班	平成20年8月	豊後高田市	E

第3表 平成19年9～10月実施分布調査一覧表 (3)

No.	事業名	地区名	工事場所	実施面積ha 実施延長m	振興局・課名	工事開始時期	関係市町村	判定
33	中山間地域総合整備事業	荻2期	竹田市荻町政所	660m	豊肥振興局 大野川上流 開発事業事務所 水利整備班	平成20年10月	竹田市	B
34	中山間地域総合整備事業	竹田西部	竹田市菅生	2,000m	豊肥振興局 大野川上流 開発事業事務所 水利整備班	平成20年10月	竹田市	B
35	中山間地域総合整備事業	竹田西部	竹田市戸上	1,000m	豊肥振興局 大野川上流 開発事業事務所 水利整備班	平成20年10月	竹田市	A
36	中山間地域総合整備事業	玖珠	玖珠町大字山浦	ほ場整備 A=2.2ha	西部振興局 農林基盤部 農村整備第二班		玖珠町	B
37	中山間地域総合整備事業	玖珠	玖珠町大字古後	ほ場整備 A=3.6ha	西部振興局 農林基盤部 農村整備第二班		玖珠町	B

第4表 平成20年2月実施分布調査一覧表

No.	事業名	地区名	工事場所	実施面積ha 実施延長m	振興局・課名	工事開始時期	関係市町村	判定
38	森林環境保全整備事業	森林管理道 西方寺山/神線	国東市国見町大字 西方寺	250m	東部振興局 農林基盤部 治山林道班	平成20年10月 月上旬	国東市	D
39	森林居住環境整備事業	森林基幹道 入蔵大峠線	大分市大字入蔵～ 沢田	300m	中部振興局 農林基盤部 治山林道第二班	平成20年9月 月上旬	大分市	D
40	森林居住環境整備事業	森林基幹道 吉四六線	臼杵市野津町大字 白岩～東谷	200m	中部振興局 農林基盤部 治山林道第二班	平成20年9月 月上旬	臼杵市	D
41	森林環境保全整備事業	森林管理道 長目半島線	津久見市大字長目	300m	中部振興局 農林基盤部 治山林道第二班	平成20年10月 月上旬	津久見市	D
42	森林居住環境整備事業	森林基幹道 宇目蒲江線	佐伯市大字青山、 直川大字赤城	1000m	南部振興局 農林基盤部 治山林道班	平成20年3月 月下旬	佐伯市	D
43	道整備交付金事業	森林管理道 大刈野線	佐伯市宇目大字 木浦内	440m	南部振興局 農林基盤部 治山林道班	平成20年9月 月上旬	佐伯市	D
44	道整備交付金事業	森林基幹道 三国灰立線	豊後大野市三重町 小坂～鷺谷	1000m	豊肥振興局 農林基盤部 治山林道班	平成20年9月 月上旬	豊後大野市	D
45	道整備交付金事業	森林基幹道 曾家中西線	日田市前津江町赤 石、中津江村合瀬	650m	西部振興局 農林基盤部 治山林道第二班	平成20年9月 月上旬	日田市	D
46	道整備交付金事業	森林基幹道 岳滅鬼線	中津市山国町大字 槻木	500m	北部振興局 農林基盤部 治山林道第二班	平成20年9月 月上旬	中津市	D
47	森林環境保全整備事業	森林管理道 西方寺山/神線	豊後高田市夷字 向ノ山	280m	北部振興局 農林基盤部 治山林道第二班	平成20年10月 月上旬	豊後高田市	D
48	森林環境保全整備事業	森林管理道 宇治藤原線	中津市山国町守実	700m	北部振興局 農林基盤部 治山林道第二班	平成20年8月 月上旬	中津市	D
49	道整備交付金事業	アクセス林道 天念寺屋山線	豊後高田市大字 長岩屋	500m	北部振興局 農林基盤部 治山林道第二班	平成20年9月 月上旬	豊後高田市	D

第5表 市町村別分布調査一覧表

市町村名	調査地	判定					市町村名	調査地	判定				
		A	B	C	D	E			A	B	C	D	E
中津市	9	1			8		津久見市	1				1	
宇佐市	3				3		竹田市	6	1	3		1	1
豊後高田市	4				2	2	豊後大野市	1				1	
国東市	1				1		佐伯市	4				4	
杵築市	2		2				日田市	3				3	
大分市	2				2		玖珠町	4		3		1	
臼杵市	8		4		4		日田市・玖珠町	1		1			
小計	29	1	6	0	20	2	小計	20	1	7	0	11	1
							合計	49	2	13	0	31	3

第6表 事業所別分布調査一覧表

事業所名	調査地	判定				
		A	B	C	D	E
北部振興局	16	1			13	2
東部振興局	2		1		1	
東部振興局日出水利耕地事務所	1		1			
中部振興局	11		4		7	
豊肥振興局	4		1		2	1
豊肥振興局大野川上流開発事業事務所	3	1	2			
西部振興局	8		4		4	
南部振興局	4				4	
合計	49	2	13	0	31	3



写真1 竹田市中村 経営体育成基盤
整備事業予定地 (No.15)



写真2 玖珠町古後 経営体育成基盤整備事業
予定地 (No.18)



写真3 中津市和田 農村振興総合整備事業予定地 (No.25)



写真4 竹田市戸上 中山間地域総合
整備事業予定地 (No.35)

自衛隊玖珠駐屯地内遺跡確認調査

No.	遺跡名	名草台遺跡		所在地	玖珠町大字帆足
調査原因	玖珠駐屯地施設建設工事			調査期間	平成19年11月12日～11月13日
調査機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター			調査担当者	高橋信武・小林昭彦
調査面積	1,200㎡	時期	縄文・弥生	遺物の保管	大分県教育庁埋蔵文化財センター

発掘調査の概要

工事予定地が名草台遺跡にあたるため、確認調査を実施した。調査は予定地に4本のトレンチを設定し、層毎に徐々に掘り下げ、遺構を確認する方法で行った。

調査の結果、遺構面までは0.7m程度と考えられた。遺構として弥生時代のピットを地表下0.8mのローム層上面で確認した。また、部分的に縄文早期～前期の包含層を確認した。出土遺物は縄文土器、弥生土器、石器などである。遺構の分布は比較的少ないと思われる。



写真5 トレンチ調査状況

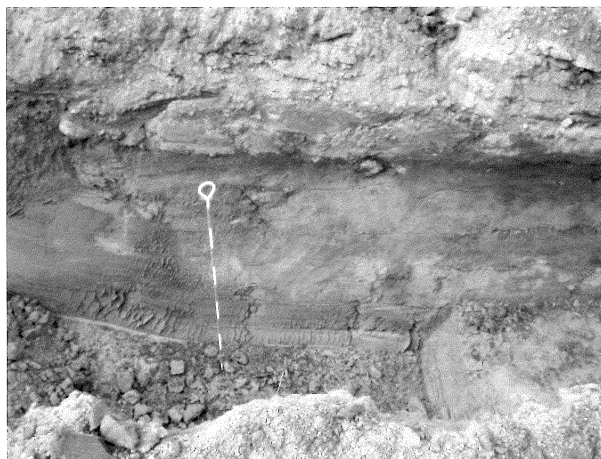


写真6 土層堆積状況

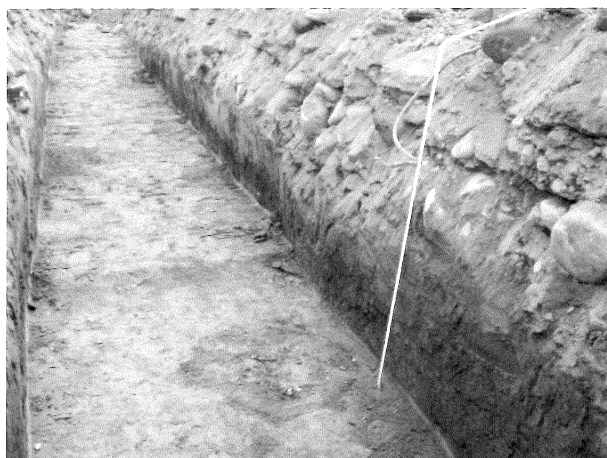
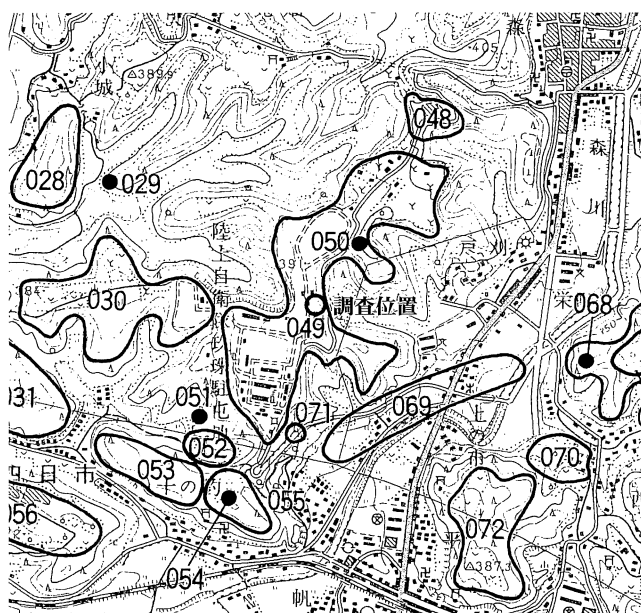


写真7 ピット検出状況



第1図 調査位置図 (S=1:25,000)

II 公立施設関係遺跡試掘・確認調査

No.	遺跡名	所在地	国東市国東町鶴川
調査原因	国東農工高校管理棟増改築工事等	調査期間	平成19年7月12日～8月16日
調査機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター	調査担当者	小林昭彦
調査面積	3,673m ²	時期	遺物の保管

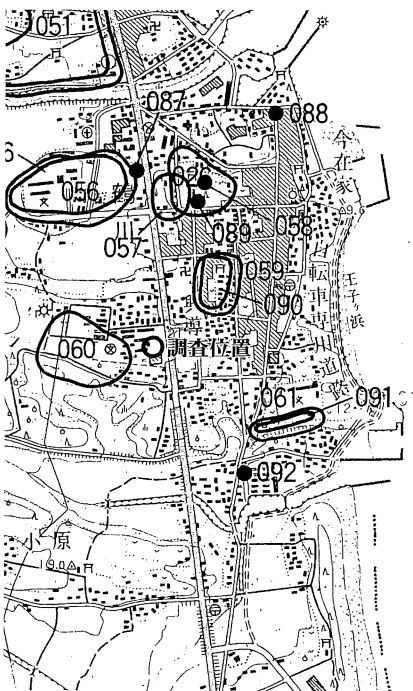
発掘調査の概要

工事予定地が高木遺跡に隣接するため、立会調査を実施した。調査は管理棟、普通教室、第二体育館の解体工事に伴い、重機を使用して表土から地山までを層毎に掘り下げ、遺構を確認する方法で行った。

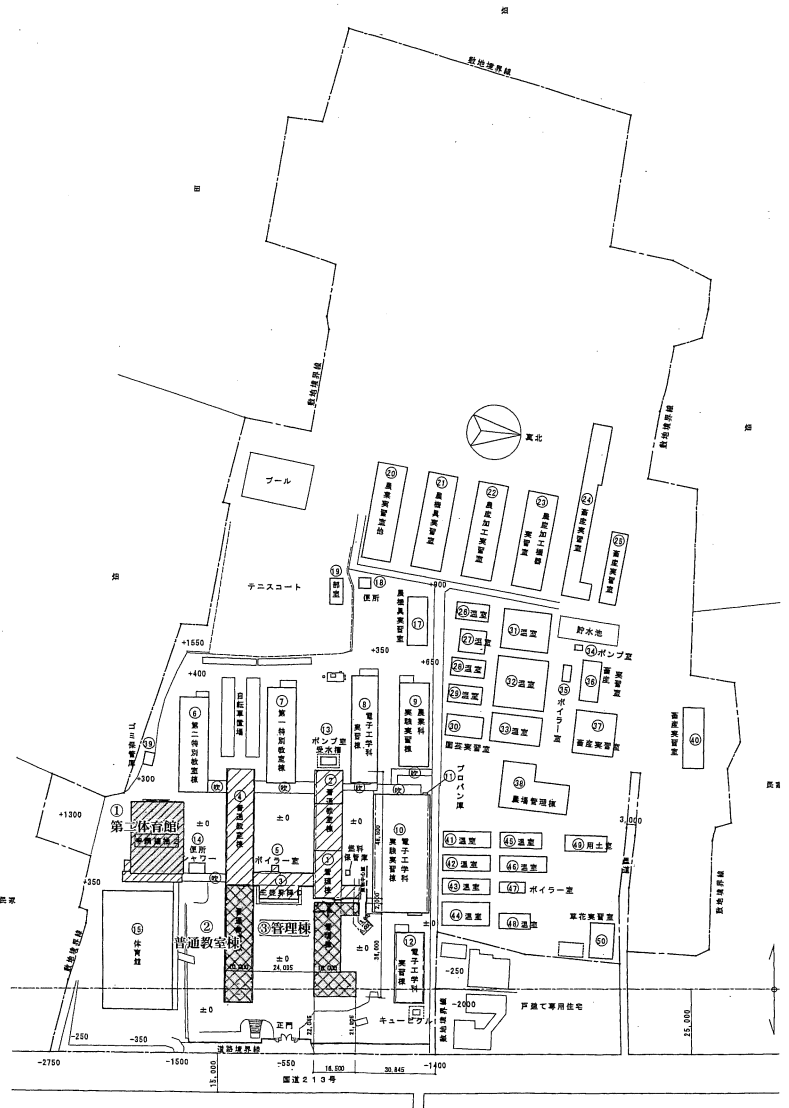
調査の結果、地山まで掘削を受けており、遺構、遺物ともに発見されなかった。高校建設時の大規模な造成に伴う掘削で旧地形が改変されたものと考えられる。



写真8 立会調査状況（管理棟・普通教室棟）



第2図 調査位置図 (S=1:25,000)



第3図 調査区配置図 (S=1:3,000)

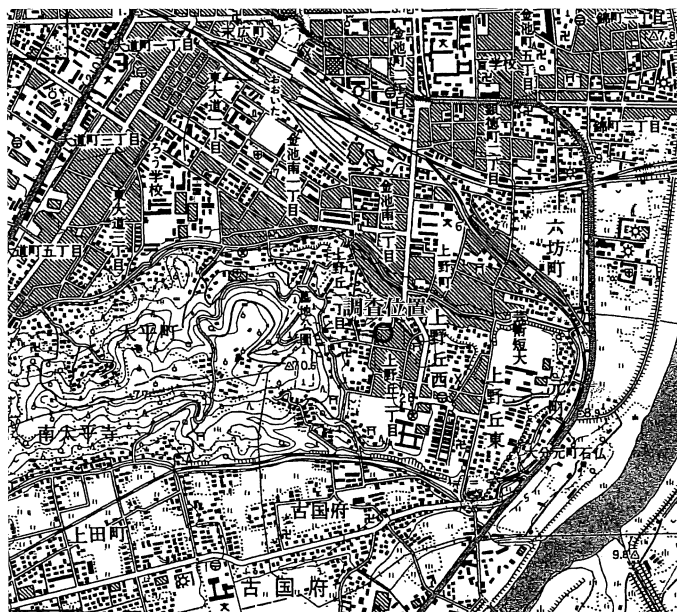
No.	遺跡名	上野遺跡群		所在地	大分市上野丘一丁目
調査原因	大分県立単位制高校他建設			調査期間	平成19年7月3日～7月17日
調査機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター			調査担当者	小林昭彦、小柳和宏
調査面積	4,000㎡	時期	古代	遺物の保管	大分県教育庁埋蔵文化財センター

発掘調査の概要

工事予定地が上野遺跡群に当たるため、確認調査を実施した。調査は予定地に17本のトレンチを設定し、重機を使用して地山まで掘り下げ、遺構・遺物の有無を確認した。

調査の結果、17本のトレンチ中5本のトレンチで遺構を検出したほか、2本のトレンチで遺構の可能性のある落ち込みが確認できた。また、一部では遺物包含層も確認された。検出した遺構は柱穴、土坑である。土坑からは須恵器や土師器等古代の遺物が出土した。

以上の結果、予定地内の一部では古代の遺跡が遺存している可能性が高い。よって事業実施にあたっては、本調査が必要と判断された。



第4図 調査位置図 (S=1:25,000)



写真9 調査前状況



写真10 遺構検出状況

III 西南戦争戦跡分布調査

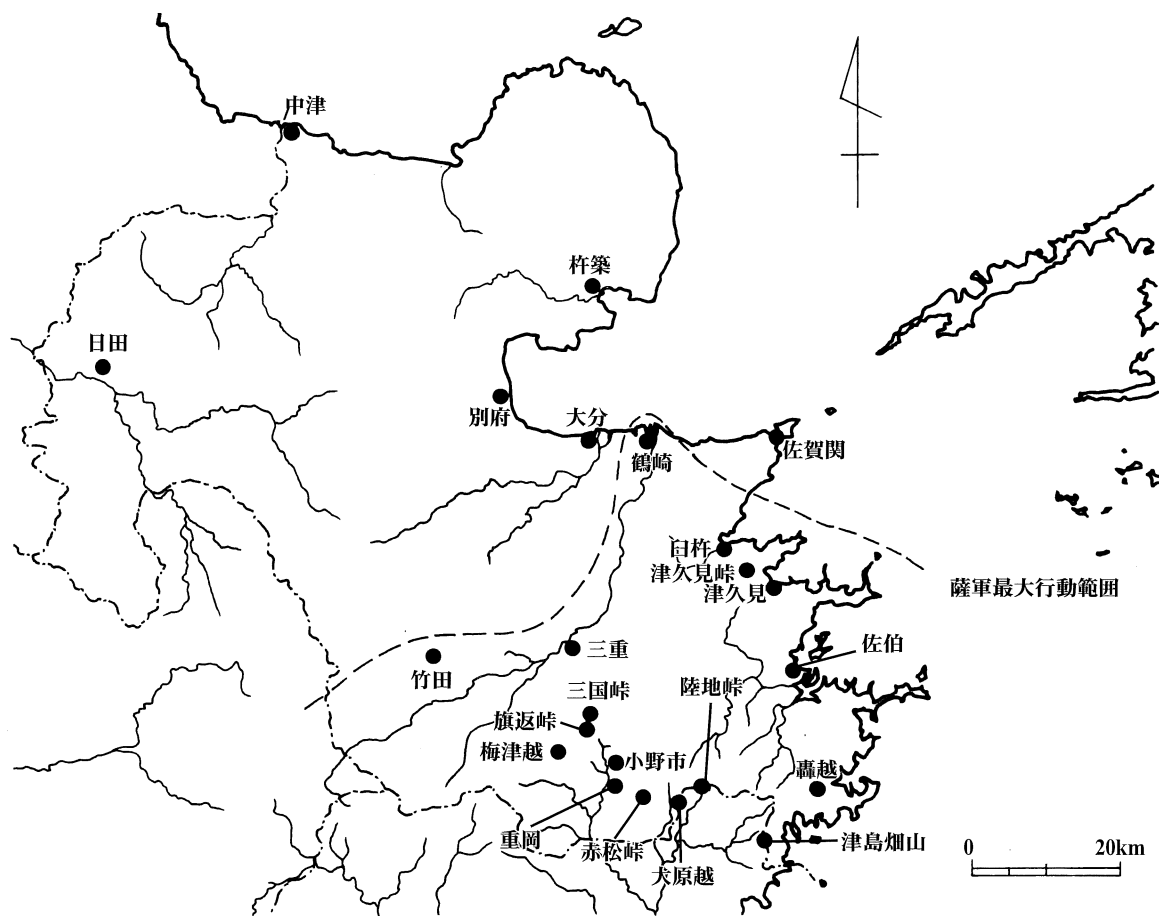
西南戦争は明治10（1877）年に起こった、わが国最後にして最大の士族反乱として知られている。戦争は鹿児島を出発した薩軍が熊本鎮台を攻撃したことを皮切りに、有名な田原坂での激戦をはじめ、戦線は熊本、宮崎、鹿児島、大分に拡大し、9月24日の城山の戦いを最後に終結した。大分方面の戦闘は、熊本戦線での敗北を受け、戦局を打開すべく野村忍介率いる奇兵隊が、当時官軍の手薄な豊後方面からの突出を図ったことによる。

県内が戦争に巻き込まれたのは5月12日からである。この日重岡を襲撃した薩軍は、この後三重、竹田、鶴崎、臼杵、及び佐伯へ侵攻し、戦線を拡大した。しかし、次第に兵力・物資で勝る官軍に押され、日豊国境の山間部に籠っての攻防線が展開された。そして8月15日に豊後方面の薩軍は、延岡和田越の戦闘に合流するため、大分県内から撤退したのである。

この間山間部を中心に、薩軍・官軍によって多数の陣地が構築された。また官軍・薩軍の記録でも陣地（以下、台場という）の記述が見られる。その一部は所在する市によって史跡指定（豊後大野市三国峠、佐伯市陸地峠・津島畑山等）されているがごく少数で、多くは地元でも存在が知られていない。近年戦跡の調査報告がなされ、ようやくその解明が始められた（西南戦争を記録する会2000・2001・2003・2005）。また、旧三重町教育委員会が台場跡の発掘調査を実施している。

大分県教育委員会では平成16年度から西南戦争戦跡の分布調査を実施し、その把握に努めているところである。この分布調査によって、新たに多数の台場を確認したほか、佐伯市宇目大原越での西洋式築城術の影響を受けた多稜堡壘群の発見など、多くの成果を挙げている。

調査は台場の位置や数量の把握を主目的とし、時間の制約上確認した台場を5,000分の1の地形図上に落とすだけのものであるが、一部の台場はその概略を把握するため平板測量や略測を行った。略測図については、平板や測量機器を用いず、磁石と巻尺による簡易なものである点を断っておく。



第5図 西南戦争関係地図

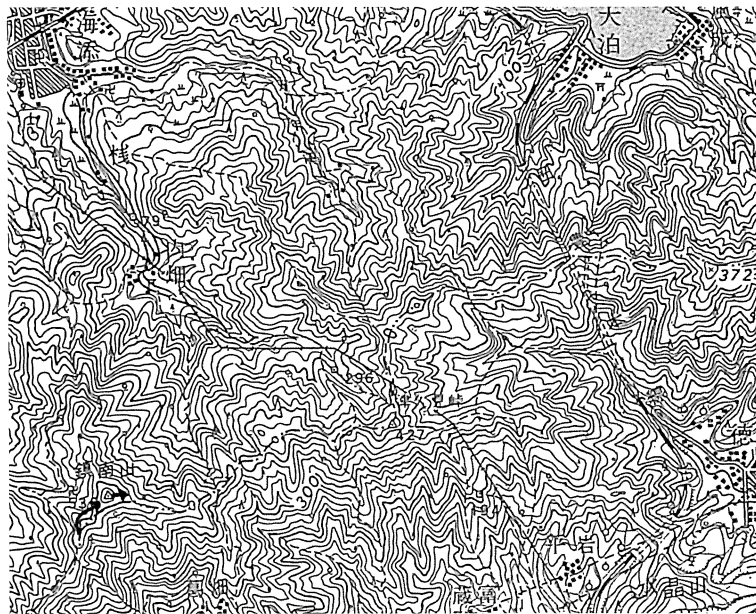
(1) 津久見市津久見峠・鎮南山

津久見峠は津久見市と臼杵市の境をなす丘陵上にあり、標高427.3mを測る。津久見峠北側の尾根筋と、峠の北約600mで分岐する東西の尾根筋を踏査したが(第7図)、遺構や遺物は認められなかった。

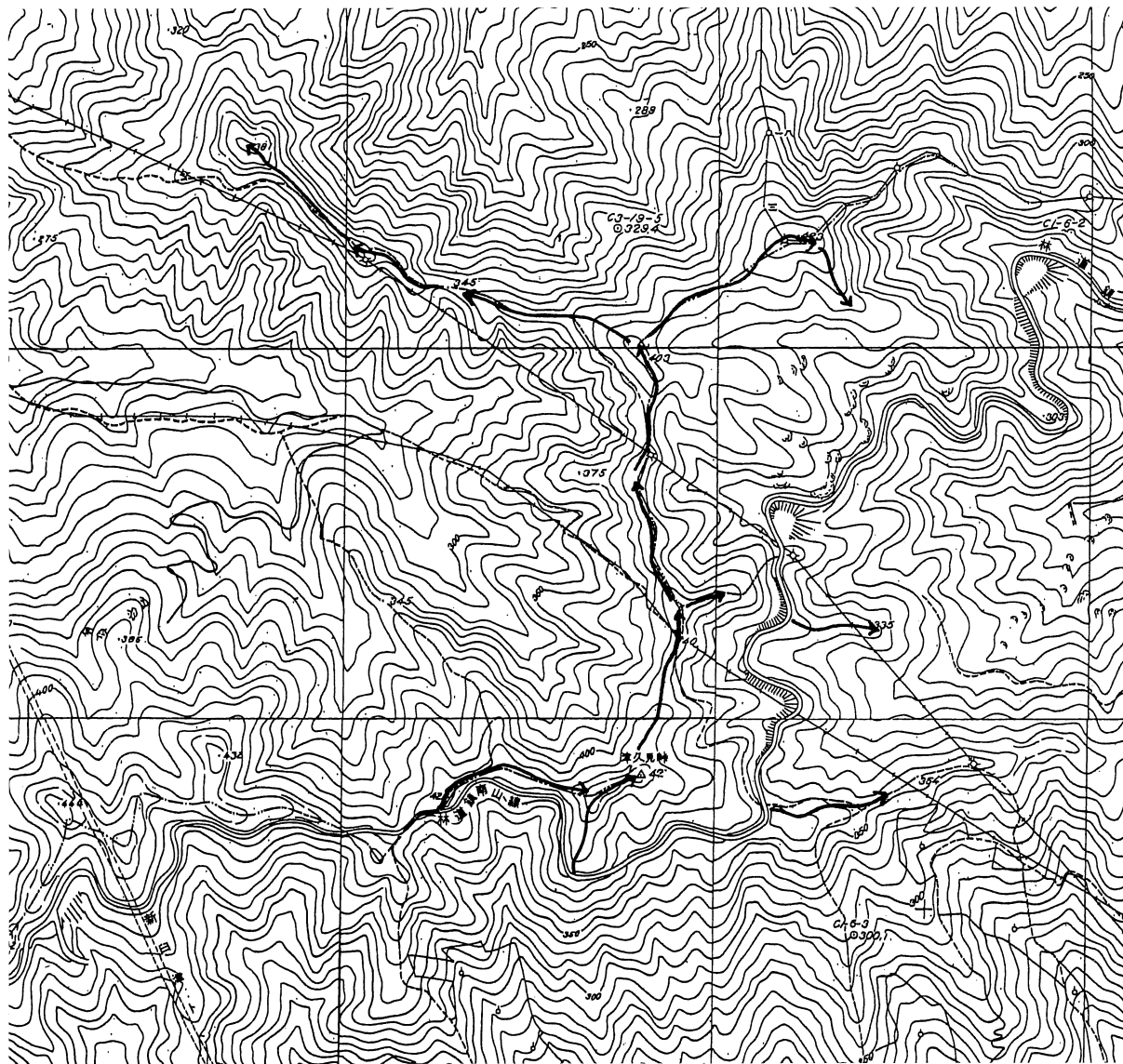
『征西戦記稿』によれば、6月10日に臼杵で敗れた薩軍は津久見峠を通過して逃れたという。

鎮南山は津久見峠の南西1.8kmに位置し、標高536.4mを測る。山頂南西側から山頂への尾根筋を踏査したが、遺構は認められなかった(第6図)。

鎮南山の南西3.6kmにある姫岳では、平成17年度に台場1基を確認している。



第6図 津久見峠・鎮南山位置図 (S=1:50,000)



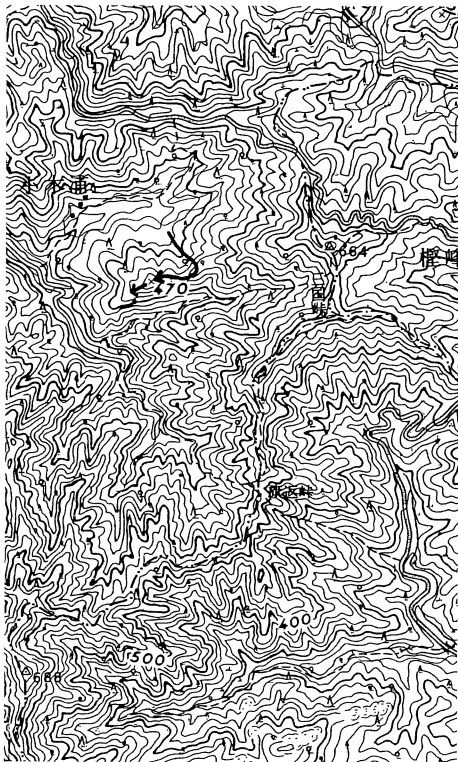
第7図 津久見峠周辺踏査経路 (S=1:10,000)

(2) 豊後大野市三重町三国峠・旗返峠

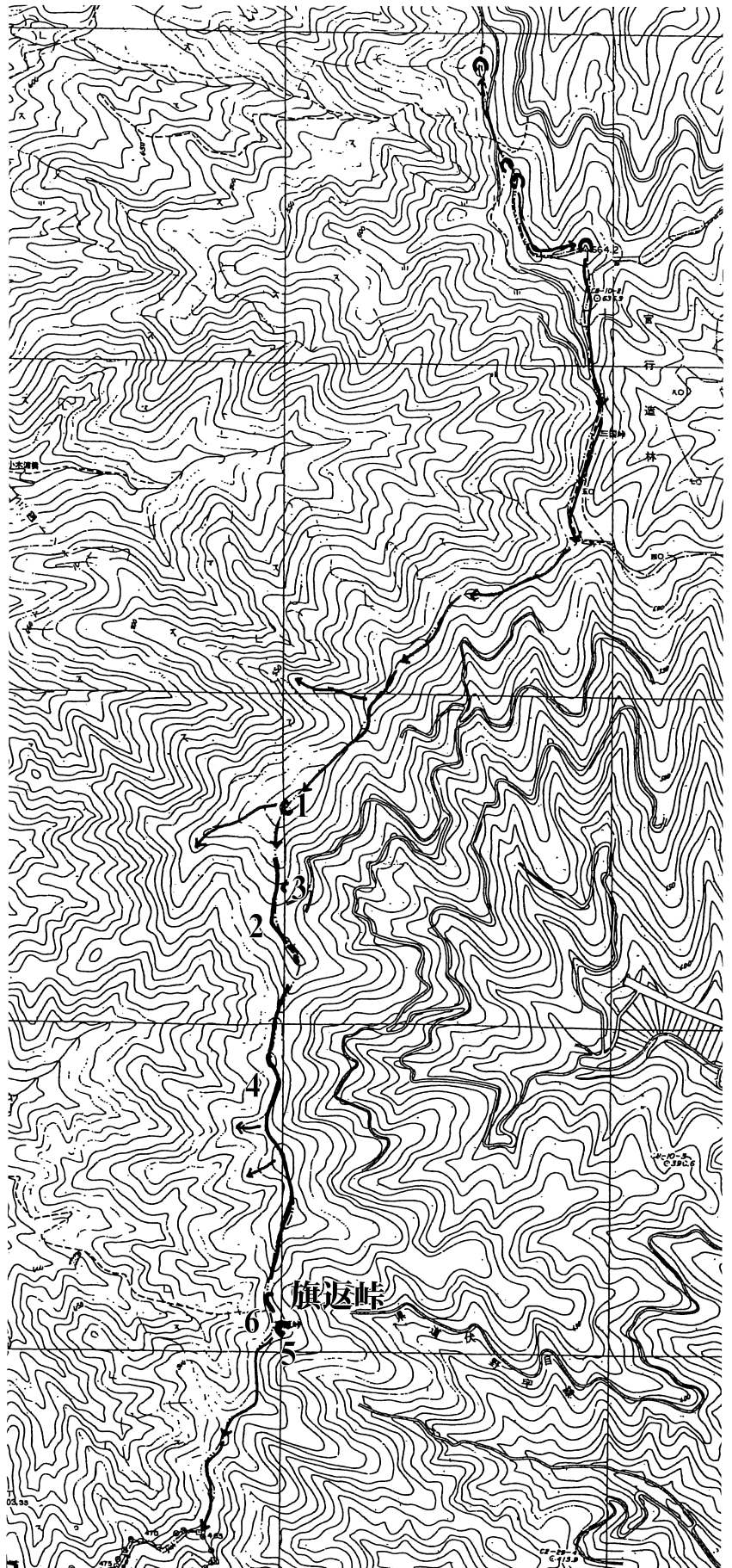
三国峠は豊後大野市三重町と佐伯市本匠及び宇目の境界にあたり、標高664mを測る。峠の名称は旧臼杵藩、佐伯藩、岡藩の3藩の境界であったことに由来する。三国峠、旗返峠は西南戦争の激戦地として知られ、旧三重町、旧本匠村が「三国峠戦跡」として史跡指定している。三国峠には数基の台場が知られ、ここで戦死した山田宗賢以下薩軍兵士11名を祀る三国神社が鎮座している。

今回は三国峠から旗返峠へ続く尾根筋と、三国峠から1.0km程度西に位置する標高約470mの尾根を踏査した(第8・9図)。

三国峠周辺は笹が繁茂し地表が覆われた状態で、確認が困難であったが、踏査の結果三角点までの間で4基の台場を確認した。いずれも半円形を呈し、北ないし北西方向に土塁を築いている。三国峠は薩軍の拠点であったことから、これらの台場は薩軍のものともてよいだろう。土塁の方向からすると、三国峠の正面は北側にあたるのだろう。



第8図 三国峠・旗返峠位置図
(S=1:50,000)



第9図 三国峠・旗返峠周辺踏査経路 (S=1:10,000)



写真11
三国峠・旗返峠中間から
小野市方向



写真12
三国峠周辺踏査
(後方の山が三国峠から
旗返峠に続く山地)

また、峠の北西にあたる小木浦トンネル上の尾根筋を踏査した（第8図・写真12）。三国峠攻防戦では官軍が峠から数百メートルの地点を奪い、ここから攻撃を仕掛けていることから、この官軍台場を探す目的であったが、台場は確認できなかった。官軍は三国峠・旗返峠と広範囲にわたって対峙していることが読み取れるが、その具体的な範囲は未解明である。また、この三国・旗返峠攻撃拠点の特定も重要な課題である。

なお、周辺では峠の北西約1kmの小木浦の尾根筋を平成16年度に踏査し、官軍台場3基を確認している。三国峠での戦闘については、総括のとおりである。

旗返峠は豊後大野市三重町奥畑に所在し、佐伯市宇目との境界をなしている。三国峠の南約1.6kmに位置し、南東へ約5kmで小野市に達する。旗返峠は三国峠とともに、小野市へ抜ける主要道であった。

三国峠の最高所、標高664mの三角点にある台場から旗返峠方面へ踏査した（第9図・写真11）。三角点から南側約450mほどで尾根は南西方向に屈曲する。ここまでは比高にして約50m下り、屈曲点は若干上りである。この屈曲点からは細かいアップダウンで、3つの頂がある。最後の頂は屈曲点から約600mで、この頂の南側で半円形台場1基（台場1）を確認した。さらにここからは旗返峠方向へ約50mほど緩やかに下る尾根筋となっており、ここに土塁が約170mにわたって続いているのが確認できた（台場2）。この台場2の内側には小規模な台場がある（台場3）。

台場2の南端からは尾根は南西方向に屈曲し、約30m下りの緩斜面となっている。この屈曲部から少し南西に進んだ所からまた長大な土塁が認められた（台場4）。台場4は旗返峠のすぐ北まで達しており、その長さは500mにも及ぶ。この台場4の南に「S」字状にクランクする切り通しの峠道がはしっている。

この峠道を越えて、さらに南方の踏査を行ったところ、峠のすぐ南にある尾根の頂で台場2基と平坦面が確認できた。さらに南へと踏査したが、これからは台場は確認できなかった。

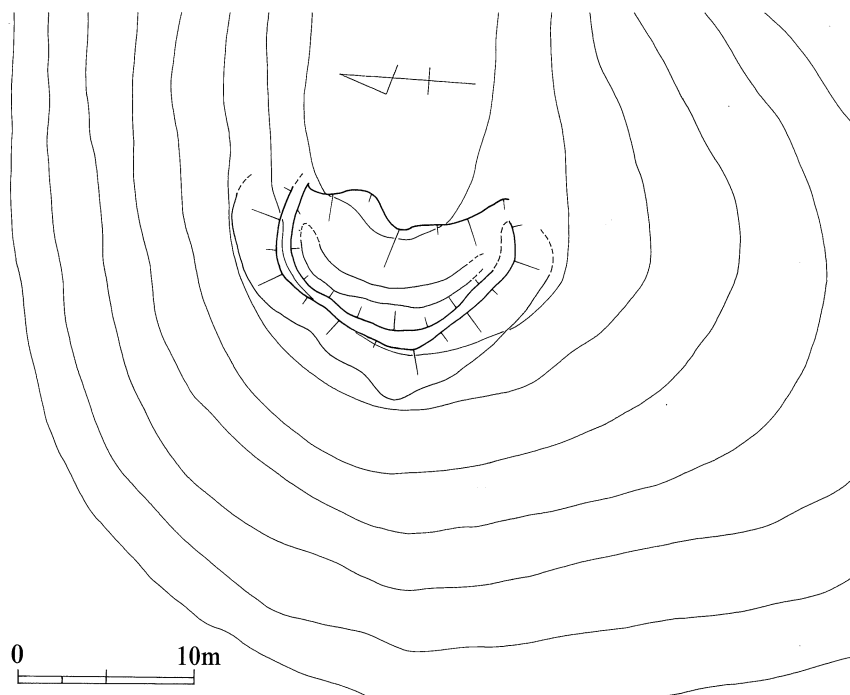
踏査に引き続き、台場1～3・5・6について略測を行った。

台場1は旗返峠の北約750mに位置する（写真13・第10図）。尾根頂部からやや下がった位置に築かれている。平面形は半円形で、西側にむけて弧状の土塁を構築している。土塁の内部は斜面を削り掘り窪めている。東西約10m、南北約18mを測り、遺存状態は良好である。

台場2は台場1の南にあり、全長約170mを測る（第11図・写真14）。台場は尾根の地形に沿って弓なりに緩やかに湾曲する。土塁は西側に構築し、東側は斜面を削り掘り窪めている。しかし窪みは中央部の下り斜面部分



写真13 旗返峠台場1



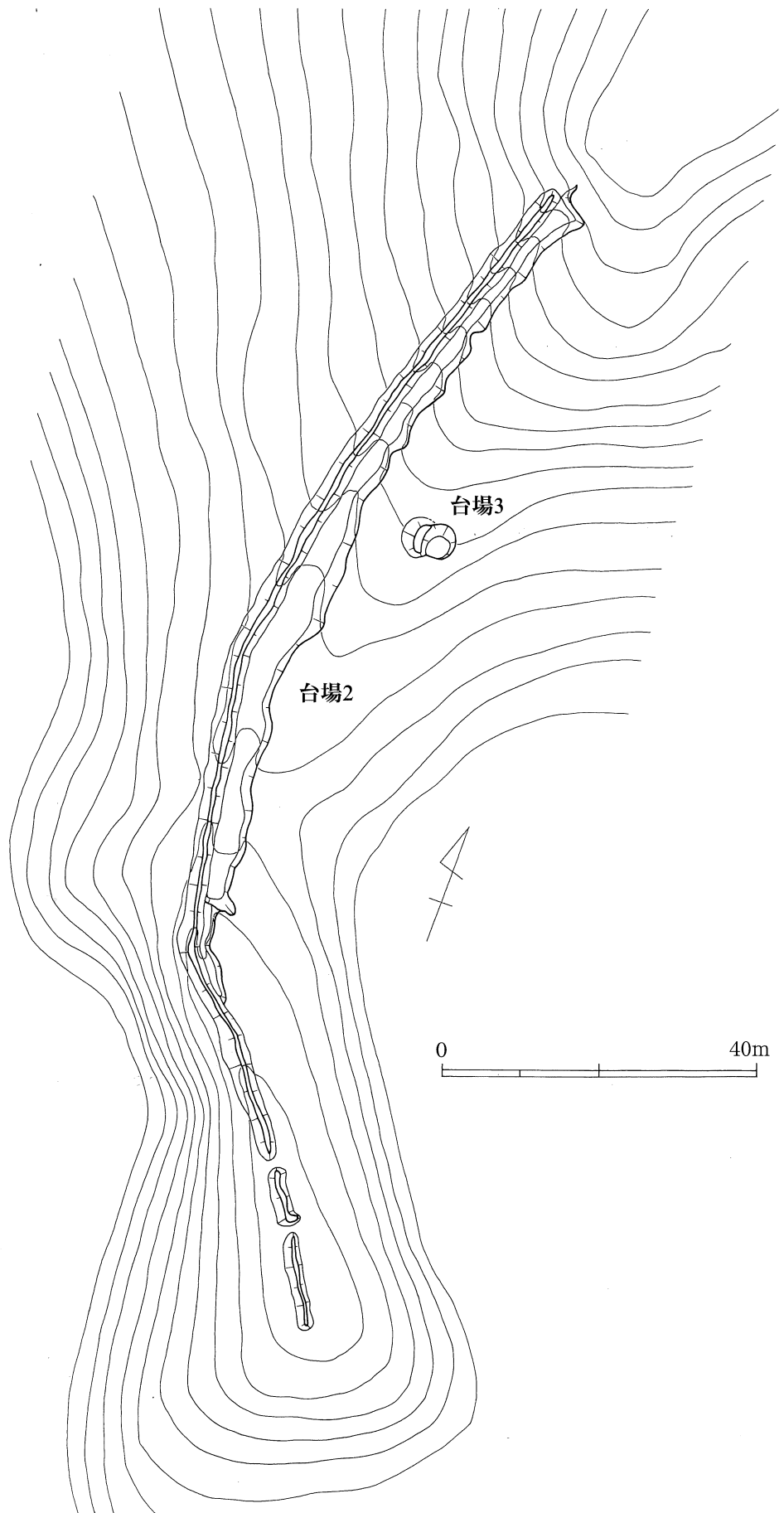
第10図 旗返峠台場1略測図 (S=1:400)

までで、比較的平坦な南側には認められない。また、南端部では2箇所土塁の切れ目が認められる。このうち1箇所では土塁端部が内側に若干折れているので、これらは出入口など、人為的に設けられたものであろう。土塁は一部痕跡的であるものの、遺存状態は良好である。

また、台場2の北半部の内側に、円形の小型台場1基が存在する(台場3)。小さいながらも西側に土塁を設け、内部を掘り窪めている。東西約8m、南北約6mを測る。

台場4は略測を行っていないため規模等詳細は不詳であるが、全長450~500mはあろう。長大な台場であり、地形にそって蛇行している。台場2と同様に西側に土塁を構築し、内側を掘り窪めている。この台場4では、他の台場と異なり土塁の一部で石積が認められる(写真15)。石積は北側と南端部近くの2箇所確認できた。特に北側のものはその周囲に巨石が多数認められることから、台場構築時に手近なこれらの岩石を利用したのであろう。石積部分は台場の残りが良好で、50~60cm程度の高さが確認できた。

台場5・6は旗返峠のすぐ南側の尾根に築かれている(第12図)。尾根頂部から北側の峠へは緩斜面となっており、ここに4つの平坦面が認められる。台場は頂上と峠寄りの平坦面に築かれている。この平坦面の時期

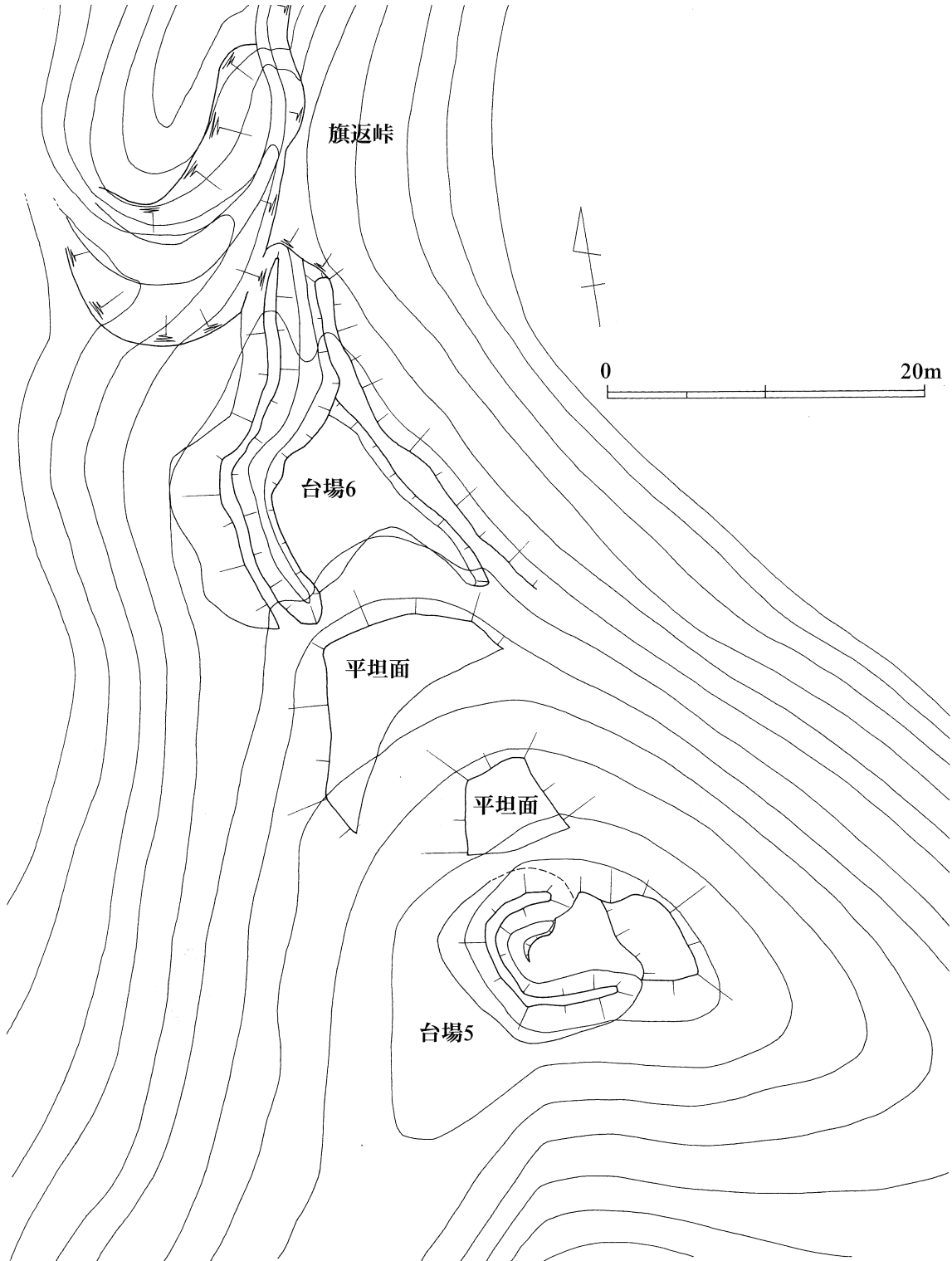


第11図 旗返峠台場2・3略測図 (S=1:800)

は明らかにできないが、台場構築にこれほどの平坦面を造成する必要はなく、少なくとも西南戦争時の構築ではない。中世に峠を抑える砦が存在した可能性が考えられよう。

台場5はこの尾根の頂上にあり、西側に向けて「U」字状の土塁を廻らせる。土塁の内側は若干掘り窪めている。東西約10m、南北約12mを測り、遺存状態は良好である。なお、頂上の平坦面は台場5の背部で東側に一段落ちこんでいるが、この落ち込みと台場の関係は不明である。

台場6は台場5の北にある2つの平坦面の先にある。西側に土塁を構築し、さらに東側にも痕跡的ながら土塁



第12図 旗返峠台場5・6略測図 (S=1:400)

が確認できた。西側の内側は一段削りこんで掘り窪めている。西側の土塁の直下は切り通しの峠道が通っている。東西約17m、南北約23mを測り、遺存状態は良好である。東西両方向を土塁で囲むなど防御の堅さが際だっており、峠を抑える重要な台場であることを示している。

以上、旗返峠についてまとめると、全長約170m、500mにも及ぶ長大な台場は、県内では初の発見である。そしてこの2つの長大な台場の両端には半円形台場が築かれている。いずれも西側に対する防御を意識しており、薩軍の台場として間違いない。『熊本鎮臺戦闘日記』6月14日の記述に「昨日城山及ヒ神明越襲來ノ賊夜ニ及テ旗返シヨリ三國峠ニ連壘二十余ヲ築キ之ニ據テ探射ス」とあり、同日のこの後の記述には「午前第三時我軍三道ヨリ三國峠旗返シヲ攻撃ス彼レ天然ノ嶮ニ壘ヲ連築シ之ニ據リ肯テ出テ戦ハス故ニ我モ亦壘ヲ築キ之ニ據ル」とある。「連壘」や「壘ヲ連築」が、この長大な台場群を指すものとみてよいだろう。



写真14
旗返峠台場2南端部
(左側に土塁の切れ目が
2箇所見える)



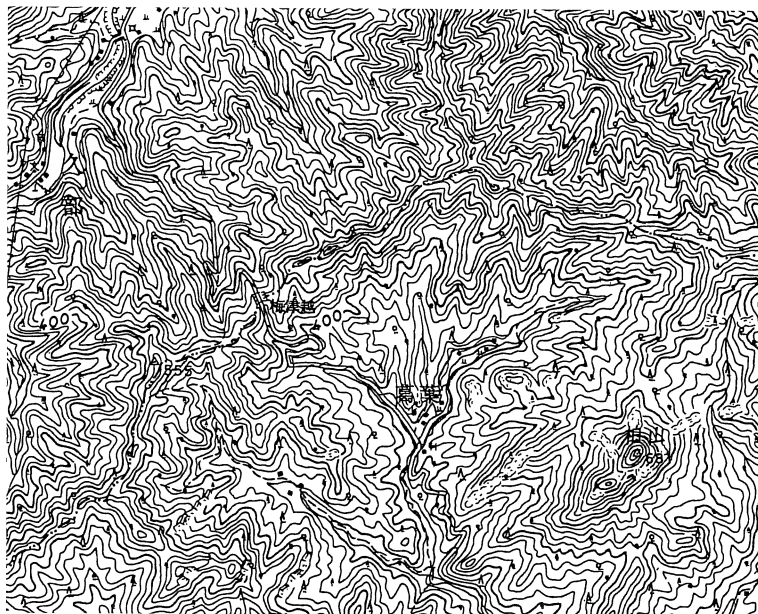
写真15
旗返峠台場4 (石積部分)

(3) 豊後大野市三重町梅津越

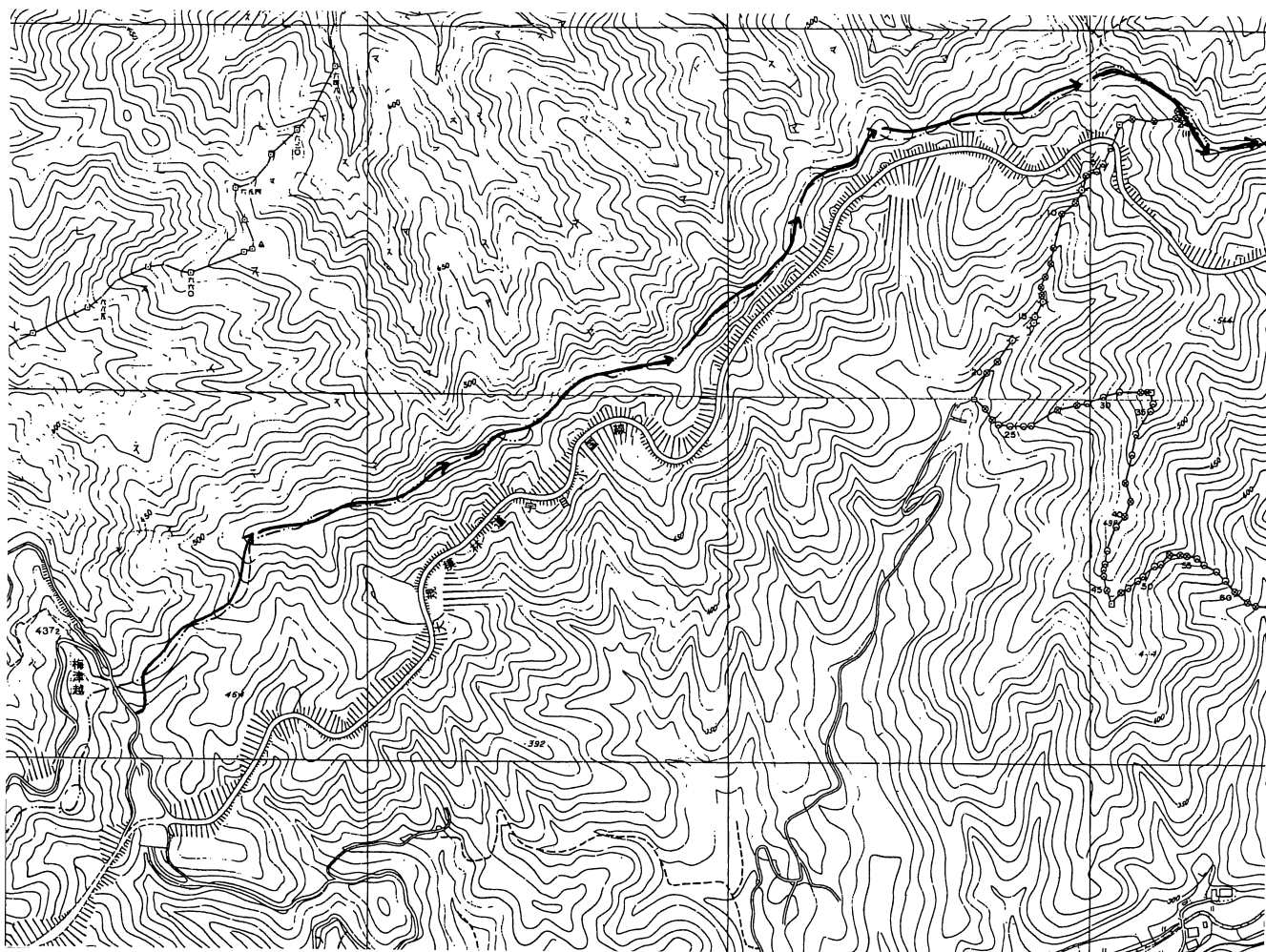
梅津越は豊後大野市三重町中津留から佐伯市宇目葛葉へ抜ける峠道である。ここから北東方向へ約6 kmで旗返峠に達する。梅津越から北東方向への尾根筋を踏査した。現在の峠道から北東約100～130mの地点で凹みを2箇所確認したが、土塁はなく台場の確認は得られなかった。ここから尾根伝いにさらに1.5km以上踏査したが、台場は認められなかった。峠の南西方向の稜線上は未踏査であり、今後調査が必要である。

『征西戦記稿』等によれば、梅津越は萩原貞固率いる東京警視隊の3小隊が攻撃を担当している。重岡進出を図った官軍は6月14日に三国峠・旗返峠・梅津越を一斉に攻撃した。奇兵二十二番中隊左半隊と延岡農兵隊が塁によって防戦したが、その日のうちに陥落した。梅津越を抜いた警視隊は、三国峠・旗返峠の陥落まで梅津・葛葉の塁に留まったという。

これらの台場の確認は今後に期したい。



第13図 梅津越位置図 (S=1:50,000)



第14図 梅津越周辺踏査経路 (S=1:10,000)

(4) 佐伯市蒲江轟越

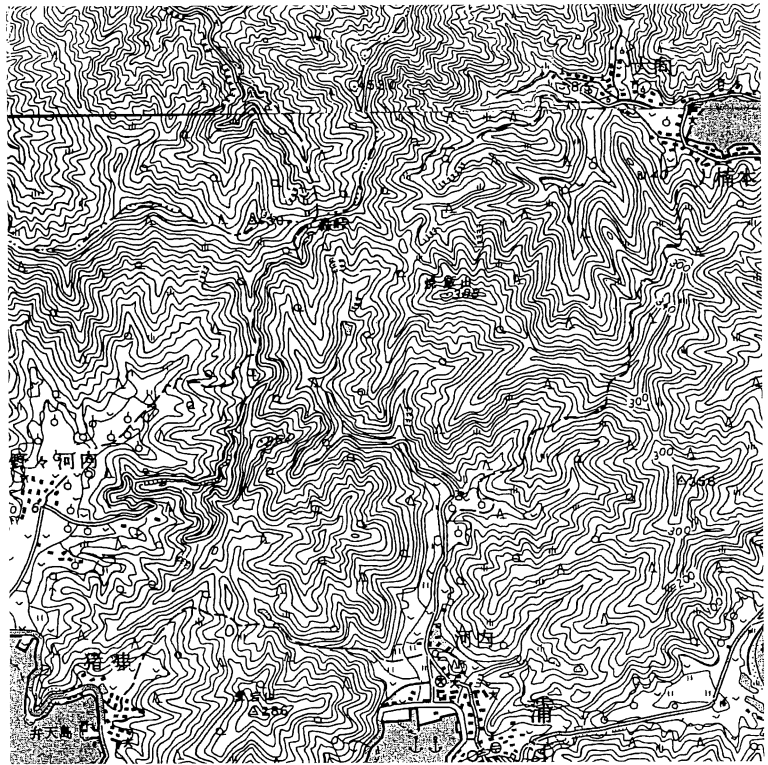
轟越は佐伯市蒲江に所在する、佐伯から蒲江へ抜ける峠道である。峠の西約400mには、標高423mの轟山が聳え、さらに西へ5.7kmで場照山に至る。『征西戦記稿』によると、三川内から丸市尾にかけて布陣する薩軍に対して、6月24日に東京警視隊2番小隊を轟越に配置したとの記述がある。以下にこの日の記事を引用する。

「(前略) 是日警視隊ハ六番小隊ヲ黒澤越二三番小隊ヲ若山嶺ニ一隊ヲ馬蹄越ニ二番小隊ヲ轟越ニ配置ス蓋シ賊兵溪ヲ隔テ三河内ヨリ丸市尾ノ間ニ屯在スルヲ以テナリ」

本年度は峠から西へ、轟山を経て場照山へ続く尾根線上約1.3km、峠の東へ延びる尾根線上約300m、轟山から南へ派生する尾根筋約1.8kmと、その先で西側に延びる尾根筋を数日かけて踏査した(第16図)。

踏査の結果、台場は確認できなかったが、轟峠から轟山の南東裾を通過して轟山の南方尾根へのびる、切り通しの旧道を確認した(写真16)。旧道は幅約2~3mあり、峠から南へはほぼ等高線に沿ってアップダウンの少ない通りである。切り通し部の旧道は基底部に石積を設け、その上部に土塁を構築している。石積は高さ約50cmで、切り通しの谷側に続いている(写真17)。旧道は所々崩壊や、削平のため寸断しているが、遺存状態は良好である。

『蒲江町史』によると、明治22年から佐伯・蒲江間の道路整備が行われ、このときに轟峠の道路も開削して整備されたようである。工事は明治24年に竣工し、明治26年に開道式が行われた(蒲江町史編纂委員会2005)。今回確認した旧道はこの明治期に整備されたものであろう。しかし、それ以前にまとめられた『征西戦記稿』等には轟越が登場すること、また、轟山南尾根上では2筋の旧道が見られることから、以前からこの峠道は使われていたのであろう。この2つの旧道のうち、東側のものは谷側に石積が見られ、峠のものと共通した構造である。したがって西側の旧道の方が古い可能性がある。現在は轟トンネルが開通しているが、昭和31(1956)年のトンネル開通まではこの轟越の道路が使われたようである。



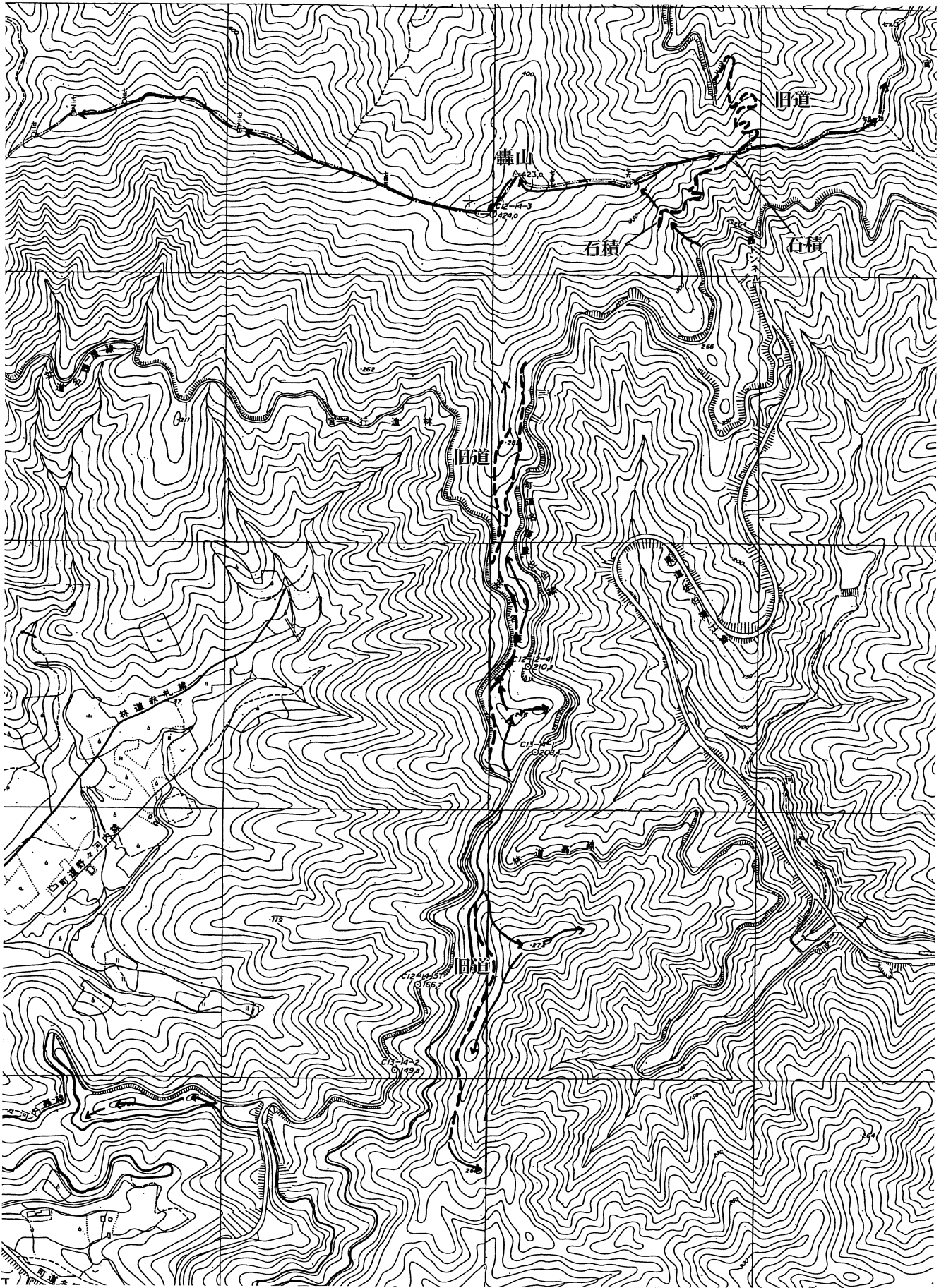
第15図 轟越位置図 (S=1:50,000)



写真16 轟越旧道



写真17 轟越旧道石積



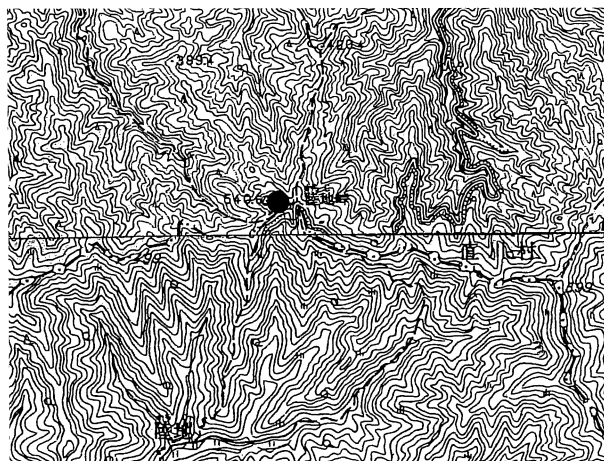
第16図 轟越周辺踏査経路 (S=1:10,000)

(5) 佐伯市直川陸地峠

陸地峠は大分県と宮崎県の県境に位置し、佐伯市直川黒沢から南下して宮崎県へ抜ける峠である。西南戦争戦跡として知られ、旧直川村が史跡指定している。

本年度は平成18年度の踏査で確認した台場2基の略測図を作成した。陸地峠のすぐ西にある三角点と、その東に建つ石碑の周囲にある台場である。この2つの台場は南北両方に土塁が作られており、当初官軍が南向きの台場を設け、その後薩軍が陸地峠を奪った際に北向きに台場を築いたものであろう。

略測図は最終年度に報告したい。



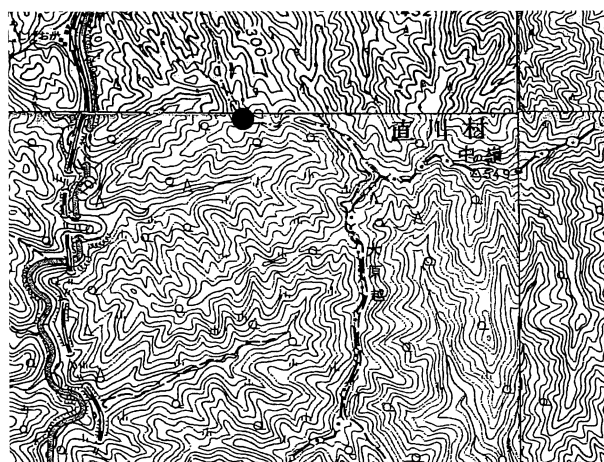
第17図 陸地峠位置図 (S=1:50,000)

(6) 佐伯市宇目大原越

大原越は大分県と宮崎県の県境に位置する。佐伯市宇目大原から宮崎県へ抜ける峠である。平成17年度の分布調査では西洋式築城術の影響を受けた多稜堡壘群が確認された。その概略は『大分県内遺跡発掘調査概報9』（高橋信武編2006）に詳しい。

本年度は平成18年度の踏査で、大原越から北西の大原集落、JR重岡駅方向に延びる尾根筋で確認した4基の台場の略測図を作成した。いずれも半円形の小規模な台場で、宮崎県側を向いている。官軍の台場であろう。

略測図は最終年度に報告したい。



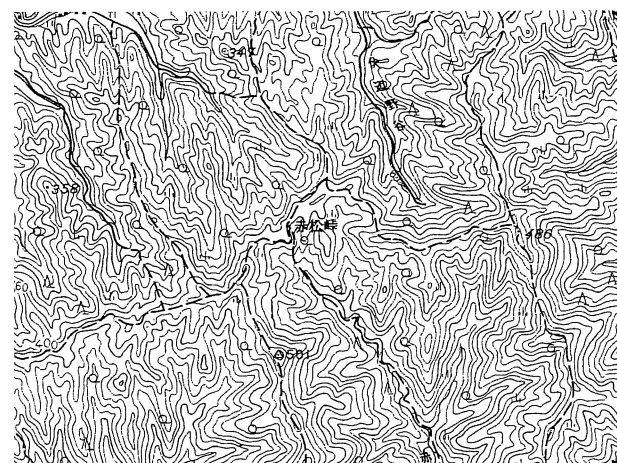
第18図 大原越位置図 (S=1:50,000)

(7) 佐伯市宇目赤松峠

赤松峠は重岡の南約2.5kmに位置し、重岡から南東方向の佐伯市宇目宗太郎方面へ抜ける峠である。

これまでの踏査で、赤松峠周辺でも台場の分布を確認している。今年度は赤松峠の古道の西側に分布する台場群について略測及び平板測量を実施した（写真18）。

測量図は最終年度に報告したい。



第19図 赤松峠位置図 (S=1:50,000)



写真18 赤松峠台場（平板測量）

総括

本年度は津久見市津久見峠・鎮南山周辺、豊後大野市三重町三国峠・旗返峠周辺及び梅津越周辺、佐伯市蒲江轟越周辺で踏査を行ったほか、佐伯市宇目大原越・陸地峠・赤松峠で台場の略測や平板測量を行った。これらのうち、三国峠で台場4基、旗返峠では両端に半円形台場を配し、その間に長大な台場を築く構造の6基の台場群を確認したが、これら以外では台場を確認できなかった。梅津越は三国峠・旗返峠とともに薩軍の重要拠点であり、この両峠と同時に東京警視隊の攻撃を受けている。記述でも台場がでてくるので、今後は峠の南西方向の踏査が必要である。また、薩軍は葛葉から木浦鉦山まで進出しており、この方面の踏査も必要であろう。轟越は東京警視隊が布陣した場所であるが台場は確認できなかった。これまでの県境尾根の踏査でも、石神峠から場照山周辺まで台場が確認されておらず、ここでも同様の結果となった。

以下、踏査で台場を確認できた三国峠・旗返峠についてまとめ、総括としたい。

三国峠・旗返峠は薩軍奇兵隊が三重や臼杵進撃に際して拠点とした天然の要害である。また、竹田、三重、臼杵を破られた薩軍にとっては、拠点である重岡への南下を食い止めるための重要な防衛線であった。

三国峠・旗返峠・梅津越の戦闘は明治10年6月13日から17日にかけて行われた。臼杵を奪回した官軍は重岡進撃に決し、まず三国峠・旗返峠・梅津越を抜いて小野市進出を目指したのである。総指揮は川上操六少佐のもと、第十三連隊、第十四連隊が三国峠・旗返峠を、東京警視隊が梅津越を担当した。

第十三連隊は5月30日に竹田から三国峠・旗返峠の薩軍に対峙している。この日の『隈岡大尉陣中日誌』に以下の記述がある。

「午前第三時兵ヲ分ツテ諸道ヨリ進軍竹田ヲ発ス。我第一大隊ハ後第二時、大分県下中津群村ニ着シ、鱒ノ内地方城山辺ニ大哨ヲ配布ス」

「中津群」は豊後大野市三重町中津無礼のことである。「鱒ノ内」は不明ながら、豊後大野市三重町増氏のことであろうか。「城山」も不明である。この哨戒線に対して、6月13日、薩軍が攻撃を仕掛けている。以下、『熊本鎮臺戦闘日記』の記述を引用する。

「午後第六時重岡ノ賊城山及ヒ神明越ノ我哨兵線ヲ襲フ撃テ之ヲ退ク」

また、この日の『隈岡大尉陣中日誌』の記述では、

「第一中隊方面ハ右小隊ヲ脇山少尉補ニ指揮セシメ、城山分遣セシ処、午後第二時十五分頃鷺谷ノ方位ニ頻ニ銃声アリ。因テ一層警戒ヲ加工居ルニ賊等突然神明峠ニ顕出シ、山頂ヲ続イテ右方ニ迂回スルヲ以テ、左翼城山ノ絶頂ニ下士以下十五名ヲ配布シ、彼ノ迂回ヲ撃射ス。」

鷺谷は中津無礼の東約7kmに位置する。この方面から薩軍が襲来したとするなら、城山は位置的に本城山の可能性が考えられる。ちなみに鷺谷から本城山は約4kmで、鷺谷と中津無礼の中間にあたる。

そして6月14日、三国峠・旗返峠の戦闘が開始される。三国峠・旗返峠の台場については、『熊本鎮臺戦闘日記』に次の記述がみられる。

「昨日城山及ヒ神明越襲来ノ賊夜ニ及ヒテ旗返シヨリ三国峠ニ連壘二十余ヲ築キ之ニ據テ探射ス」

「午前第三時我軍三道ヨリ三国峠旗返シヲ攻撃ス彼天然ノ嶮ニ壘ヲ連築シ之ニ據リ肯テ出テ戦ハス故ニ我モ亦壘ヲ築キ之ニ據ル」

この連壘あるいは連築という記述から、台場を連ねて防御していることが読み取れる。すなわち、旗返峠でみられた長大な台場をこれに想定することができよう。官軍は三国峠・旗返峠を攻めたが、薩軍は台場に籠って応戦したため、官軍はこれを落とすことができなかった。官軍は両峠に対峙する山によって台場を設けている。『隈岡大尉陣中日誌』の6月14日には次の記述がみられる。

「…即チ一小隊半ヲ友岡中尉ハ引率シテ釘浦村ニ至リ、(三国峠ヨリ旗返シニ通スル枝道)直チニ哨兵ヲ配布シテ各要所ニ胸壁ヲ設ケ、而シテ、コノ地ハ三国旗返シノ賊壘ヲ距ル凡ソ八百メートルノ巨離ニシテ、午後第三時初メテ開戦シ、彼我共ニ狙撃ヲナス。」

この「釘浦」については、「小木浦ノコトカ」との注がある。平成16年度の小木浦の踏査では、官軍台場3

基を確認している。いずれも三国峠から約1～1.5kmで、距離が記述と一致しないが、これらがこの記述の台場の可能性もある。

また、『熊本鎮臺戦闘日記』の6月15日・16日の記述を引用する。

「午前第四時三国峠旗返シノ兩所ニ開戦三国峠ノ正面ハ大嶺越七回り越ノ兩道ヨリ侵入三國ノ境山ヲ畧取彼ヲ距ル五百米突ノ地ニ胸壁ヲ築キ之ニ據ル左翼モ加藤越ヲ奪ヒ之ヲ固守ス旗返シロハ頻ニ大砲ヲ發射シ胸壁數ヶ所ヲ撃破ス」

「昨十五日略取スル所ノ三國境山ニ山砲一門ヲ備ヘ透射ス」

これらの記述から、三国峠正面は2方向から攻撃を受け、さらに峠から500m程度の所にある三国境山から砲撃をされたことがわかる。ここに出てくる大嶺越・七回り越・三国境山の場所も不明であるが、三国峠の台場が北向きに構築されているため、この方向が正面と考えられる。いずれにせよ、小木浦や三国境山など、三国峠の周囲に台場を築きながら、峠に攻撃を加えていることがわかる。ちなみに胸壁数箇所を破壊したとある旗返峠では、そのような痕跡は確認できなかった。

翌6月17日、官軍はついに三国峠・旗返峠を攻略する。この日の『熊本鎮臺戦闘日記』を引用する。

「午前第二時中央ノ一中隊中尉佐武廣命ノ部下軍曹川野邊常松及ヒ伍長二名兵卒十四名ヲ撰拔シ三國峠ノ正面第一ノ賊壘ニ潜進突入セシメ銃劔ヲ以テ其十二名ヲ殪ス次テ第二第三ノ壘ノ背面ヲ射撃ス彼レ蒼惶壘ヲ捨テ走ル此時他ノ一中隊モ亦左翼ノ賊壘ニ迫ル彼レ防支スル能ハス三國峠ノ諸壘悉ク陥ル其左翼旗返シノ賊亦連リ走ル是ニ於テ三道齊ク進ミ三國峠及ヒ旗返シノ險ヲ奪ヒ遂ニ小野市ニ至ル時尚第七時ナリ此進取ノ速ナルヤ壘ヲ抜ク十ヶ所行進スル五里傷者僅ニ一名ナリ」

第一壘は現在薩軍兵士の墓碑がある最北の台場を指すのであろう。この先に台場2基が近接してあるが、これが第二・第三壘と考えられる。残る左翼の壘はやや離れた最高所の台場であろうか。官軍は選抜隊の銃剣突撃とともに総攻撃をしかけ、ついに三国峠を落としたのである。この時旗返峠も総攻撃によって陥落した。先の記述に「壘ヲ抜ク十ヶ所」とあるが、この数は三国峠と旗返峠で確認した台場の総数と一致する。先の小木浦の官軍台場等とともに、踏査によって記述が裏付けられたといえる。

しかし、この戦闘経過の全てを解明できたわけではない。今回の踏査で薩軍の台場を明らかにすることができたが、それを取り巻く官軍の拠点はほとんど確認できていない。三国境山をはじめ峠周辺の地名の解明と、周辺の踏査を継続するによって、この三国峠・旗返峠の戦闘を具体的に明らかにすることができよう。三国峠・旗返峠以外でも、文献に出てくる地名がわからないものが多い。これらの解明のためにも、地道な踏査を継続し、その成果と記述をつきあわせて検証する必要がある。

参考文献

- 蒲江町史編纂委員会 2005 『蒲江町史』 蒲江町
熊本史談会 1980 『西南戦争隈岡大尉陣中日誌』
西南戦争を記録する会 2000 「西南戦争を考古学的にみる－宇目町黒土峠の場合－」
『大分県地方史』第181号 大分県地方史研究会
西南戦争を記録する会 2002 『西南戦争之記録』第1号
西南戦争を記録する会 2003 『西南戦争之記録』第2号
西南戦争を記録する会 2005 『西南戦争之記録』第3号
高橋信武編 2005 『大分県内遺跡発掘調査概報8』 大分県教育庁埋蔵文化財センター
高橋信武編 2006 『大分県内遺跡発掘調査概報9』 大分県教育庁埋蔵文化財センター
高橋信武編 2007 『大分県内遺跡発掘調査概報10』 大分県教育庁埋蔵文化財センター
陸軍省参謀本部 1882 『熊本鎮臺戦闘日記』
陸軍省参謀本部 1887 『征西戦記稿』

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおいたけんないいせきはつくつちょうさがいほう							
書名	大分県内遺跡発掘調査概報							
副書名								
巻次	11							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	小林昭彦、小柳和宏、綿貫俊一、横澤 慈							
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター							
所在地	大分市大字中判田字ビワノ門1977番地							
発行年月日	平成20（2008）年3月25日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
なくさだいせき 名草台遺跡	くすぐんくすまほあし 玖珠郡玖珠町帆足	462	652049	33°17'33"	131°8'58"	2007.11.12 ～ 2007.11.13	1,200㎡	確認調査
うえのいせきぐん 上野遺跡群	おおいたしうえのがおかいちちょうめ 大分市上野丘一丁目	201	322047	33°13'28"	131°36'37"	2007.7.3 ～ 2007.7.17	4,000㎡	確認調査
みくにとうげ 三国峠	ぶんごおおのしみえまちはた 豊後大野市三重町奥畑	212	541082	32°54'50"	131°36'38"	2007.5.10		分布調査
はたがえしとうげいせき 旗返峠遺跡	ぶんごおおのしみえまちはた 豊後大野市三重町奥畑	212	541119	32°53'56"	131°36'24"	2007.5.10 ～ 2007.5.22		分布調査
うめつとうげいせき 梅津峠遺跡	ぶんごおおのしみえまちなかつる 豊後大野市三重町中津留	212	541118	32°52'36"	131°32'59"	2007.5.28		分布調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
名草台遺跡	包蔵地	縄文、弥生	ピット	縄文土器、弥生土器				
上野遺跡群	包蔵地	古代	土坑、ピット	須恵器、土師器			本調査が必要	
三国峠	戦跡	明治	台場4基				西南戦争の台場群	
旗返峠遺跡	戦跡	明治	台場6基				西南戦争の台場群	
梅津峠遺跡	戦跡	明治						
要約	<p>農林業関係事業に伴う分布調査、公立施設等事業に伴う試掘・確認調査、西南戦争戦跡の分布調査を実施した。西南戦争戦跡は三国峠で台場4基、旗返峠で台場6基を確認した。旗返峠には全長約170m、約500mに及ぶ長大な台場が存在する。旗返峠の台場の一部について略測図を作成した。</p>							

大分県内遺跡発掘調査概報11

発行年月日 平成20(2008)年3月25日
編集・発行 大分県教育庁埋蔵文化財センター
所在地 〒870-0011
大分市大字中判田字ビワノ門1977番地
TEL(097) 597-5675
印刷 株式会社 有明印刷 大分支社
所在地 〒870-0844
大分市古国府1303-1
TEL(097) 546-6677